

高校総合学科の魅力の再構築

— 地域との連携を基軸として —

学校力開発分野(17220919) 松村 将人

国が平成6(1994)年度に高等学校に創設した総合学科は、23年が経過した現在、新規に開設する学校数や総合学科に通う生徒数が横ばいとなっている。本県においても同様の傾向がみられる。本研究では、設立当初の理念や県内総合学科の特色ある取組から魅力を再構築し、地域に根差した存在感ある総合学科高校の今後の在り方を考察する。

[キーワード] 総合学科, カリキュラム, 地域連携, 資質・能力

1 問題の所在

(1) 「総合学科」とは

① 総合学科設立の背景と理念

高等学校の進学率は平成29(2017)年に98.8%に達し、一部の者が進学する学校から国民的教育機関へとその性格を変えている。普通科については、高校卒業後に就職する生徒が少なくない中、大学進学に向けた教育課程が編成されている所が多く、就職者に対して十分な職業教育が行われているか疑問である。また、職業学科においても、進学希望者が増加しているにもかかわらず、一部には専門分化した職業教育が行われており、教科指導の面で進学希望者への対応が不十分な現状がある。

文部科学省(2013)によると、産業・就業構造が大きく変化している時代において、既存の特定の職業のための職業教育だけでなく、あらゆる職業に共通の実際的な知識・技能を習得されることが求められている。このような認識の下、普通科と職業学科を統合するような新たな学科の設置が適当である旨の提言がなされたのが、平成3(1991)年の中教審答申である。「将来の職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚を深めさせる学習を重視」することと「生徒の個性を生かした主体的な学習を通じて、学ぶことの楽しさや成就感を体験させる学習を可能にする」ことが総合学科に期待されているとうかがえる。実際、文部科学省(2000)に記載されている平成11年度調査では、在校生の7割、卒業生の約8割が総合学科で学んでいることに「満足」「ほぼ満足」しているとの結果が出ている。これは、高校生一般について学校生活への満足度を聞いた調査結果の55%を大きく上回っ

ている。また、平成10(1998)年度における一般入試の受験倍率は、総合学科1.34倍、普通科1.18倍、専門学科1.33倍となっており、総合学科は魅力ある学科として期待されていたことがうかがえる。具体的には、前述の文部科学省(2013)によると、平成11年調査で生徒が総合学科を選んだ理由として、「自由に学ぶ科目を選択できること」を挙げた生徒が66.3%と一番多く、「やりたい勉強ができる」が64.4%で続く。その後行われた平成19(2007)年調査では、「やりたい勉強ができる」が52.7%と最多になり、「自由に学ぶ科目を選択できる」が48.8%と続く。選択の自由さを魅力とする傾向から学習内容、即ち、カリキュラムを魅力とする傾向にシフトしている様子がうかがえる。この2項目は他の項目と比較して優位性があり(3番目の項目はいずれの調査も「学力に合っている」H11:35.3%→H19:37.0%)、進学か就職かの2者択一の様相がある高校入試に一石を投じ、生徒のニーズを掴んだことをうかがわせる。

ここで、勤務校における魅力的なカリキュラムの具体的事例を紹介する。「観光振興」という授業の中では、授業を選択した生徒が「駅からハイキング」の案内役として、最寄り駅から観光客を浜田広介記念館や旧高島駅、昭和縁結び通り商店街などを巡る全行程14kmを歩く。高島を探検し、好きになってもらうという企画である。この授業における学びや、「駅からハイキング」を通して町役場職員に興味を持ち、上級学校卒業後に採用された者がいる。この生徒は、もともと地域振興や観光に興味があつてこの科目を積極的に選択したわけだが、その学びを進路選択へと生かしている。このような学びを、数名の生徒に限るのではなく、

全ての生徒に対して体験してほしいと感じる。勤務校には他にも、「農業と環境」の授業において地元農家が授業担当者となり、生徒たちは農業に従事する。このように、地域と結びつき、地域に出て活動するような多様な選択科目が用意されており、どの生徒も選択できる自由が保証されている。

② 総合学科の特色

総合学科の特色としては、次の4つが挙げられる。第1に、将来の職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚を深めさせる学習を重視することや、生徒の個性を生かした主体的な学習を通じて、学ぶことの楽しさや成就感を体験させる学習を可能にすること。第2に、多様な入学選抜や単位制の導入によって教育課程の弾力化を容易にし、選択による個性化（「個性化＝選択」）と多様化路線を徹底させ、いわゆる偏差値を尺度とした序列により進路を決めるやり方を打破すること。第3に、系列を設けることで学びの系統性を生徒に意識させながら生徒の知的好奇心を深め、自己の将来の進路選択を含め人間としての在り方や生き方についてよく考え、賢い社会人として育成していくこと。第4に、特に1年次の必修科目である「産業社会と人間」では、自己の生き方を探究するという観点で自己啓発的な体験活動や講演会、討論会を通して、将来の職業生活に必要な態度やコミュニケーション能力を養い、地域社会における自己の存在感や有用感を持たせる取組を充実させることである。国の調査では、「自己の個性について理解を深め、伸ばそうとする意欲を持つことができる」という項目について、肯定的意見を持つ生徒は、平成11年調査の66.7%から平成19年には72.6%に増加している。

(2) 総合学科の現状

① 全国の状況

平成6年4月から開設された高等学校「総合学科」は、全体的な生徒数減少の中にあっても順調に生徒数を伸ばしてきた。平成16(2004)年度には生徒数が12万人に達し、農業科を上回る学科へと成長したが、平成22(2010)年度に17万人を超えた後は横ばいとなり、平成25(2013)年度と29年度は生徒数減少に転じている。平成29年度は前年比1,189人減の175,529人である。総合学科の課題としては、主体的な科目選択を行わせることが難しい（安易な選択を行う）ことを挙げる学校・教育委員会が多い。

② 県内の状況

本県では、平成22年度まで定員の9割の充足率を維持していた。勤務校が総合学科になった平成16年度は、県内全体で99.6%の定員充足率である。ここに、総合学科への期待が表れている。しかし、平成23(2011)年度に9割を下回り、その後3校が新たに総合学科になるなどして生徒数は増加したが、充足率は伸びていない。勤務校も3年間定員割れが続いた。現在、総合学科の直面する課題として、次の3点が挙げられる。1つ目は、志願倍率が低迷していること。国の調査によると、総合学科に入学したいという希望をもって入学する生徒は5割に満たないという結果が出ている。平成29年度において、県内8校の総合学科でも、定員の9割に満たない学校は表1の通り8校中6校あり、定員に対する充足率は、82.0%で過去最低となっている。2つ目は、生徒のニーズが変化しているにもかかわらず、高校側がそれに十分対応できていないこと。中学生から、総合学科で積極的に学びたいと支持されず、入りやすさや自由度という側面だけが未だに強調されているのではないかと。3つ目は、将来の職業選択につながるカリキュラムが用意されているにもかかわらず、そのことを中学生とその保護者や地域の人々、さらには、中学校や高等学校の教員に十分な理解がなされていないこと。勤務校においても、地元中学校からの入学者が減っていることから、魅力があって地域から必要とされるような存在感ある高校となっていないという懸念がある。

2 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

総合学科の理念や意義を検証して、総合学科の魅力とは何かを明らかにする。そして、総合学科の学びを系統立てる「系列」を中心として、特徴あるカリキュラムの要素を探ることを目的とする。

(2) 研究の方法

佐藤学(1996)の先行研究に基づいて、「総合学科」やキャリア教育の学び方を整理する。また、教職専門実習Ⅱにおける実践やアンケート結果などから、生徒にとっての魅力に関する要素を探る。さらに、県内の総合学科の取組から、地域連携や系統立てた学びにかかる特徴を分析し、総合学科の魅力の再構築に必要な要素を探る。

表1 山形県内高校総合学科 系列の特徴

No	学校名	基本情報					系列名	系列の特徴
		開設年度 (平成)	1学年 クラス数	総生徒数	教員数 (常勤)	平成28年度 進路状況		
1	天童 高等学校	11	4	479	41	155人中 進学108(69.7%) 就職47(30.3%)	4系列 文理総合 情報ビジネス 会計ビジネス 保健福祉	保健・福祉系列では、系列を選択すると履修科目がほぼ決まる。文理総合は専門学校を含む大学進学者向けの系列で半数以上が選択。
2	左沢 高等学校	25	3	289	33	99人中 進学44(44.4%) 就職55(55.6%)	3系列 教養 総合ビジネス 果樹園芸	教養系列は数科学習を中心に学習し、科目選択の幅は広い。総合ビジネスや果樹園芸系列は、系列を選択した時点で履修する科目がほぼ決まる。ただし、系列をまたいだ科目選択も可能。
3	北村山 高等学校	19	4	291	39	111人中 進学54(48.6%) 就職56(50.5%)	4系列 文理総合 体育総合 生活総合 情報総合(H29まで)	生活総合系列では、生徒が地域の名産であるそばを活用した染色を行った。考究基礎、考究実践という授業を新設し、地域に向向いて積極的に地域を学び、課題の解決に向けて深く学んだことを地域に発信・提案する。
4	高島 高等学校	16	3	313	32	119人中 進学88(73.9%) 就職31(26.1%)	4系列 地域環境 観光文化 福祉共生 知性創造	系列にとらわれず、自分の興味関心に応じて、選択科目から選ぶことが可能。地域の農家が専門教科農業の授業を受け持っている。
5	荒砥 高等学校	25	2	183	22	55人中 進学20(36.4%) 就職33(60.0%)	3系列 文理総合 福祉・生活 ビジネス・教養	系列ごとに選択科目が設定されているが、科目によっては、全系列に配置されており、どの系列においても選択できるよう工夫されている。
6	鶴岡中央 高等学校	10	総合学科 4 (別二普通科3クラス が併設されている)	総合学科 473 (普通科と 合わせて812)	68 (普通科と 合わせた合計)	146人中 進学100(68.5%) 就職46(31.5%)	5系列 国際交流 情報科学 美術・デザイン 社会福祉 家政科学	系列ごとに担当の教科が決まっている。その系列ごとに事業を展開している。家政科学系列は、さらに被服系、食物系、保育系に分かれ、地域の伝統文化や産業にかかわる活動を展開。
7	庄内総合 高等学校	7	3	272	33	96人中 進学28(29.2%) 就職68(70.8%)	5系列 人文科学 自然科学 スポーツ・芸術 生活・福祉 産業クリエイト	町の行政課題の解決に向け、取材活動や意見交換会を行い、それらの学習成果として町に対して提案書を作成する「ふるさと探究」や地元企業と行政機関が連携して行う、高校生向け職業体験会「WAKU WAKU WORK」を行っている。選択科目は、系列を超えて自由に選択できる。
8	遊佐 高等学校	27	1	93	12	36人中 進学20(55.6%) 就職16(44.4%)	2系列 教養 地域共生	地域共生系列のデュアル実践では、半年間週1日、遊佐町内の事業所でインターンシップを行う。

3 先行研究の検討

(1) 高校の「総合学科」構想

佐藤学(1996)は、『総合学科』は、単に従来の普通科と職業学科の中間に位置する学科ではなく、『地域の産業界等との密接な連絡』と『理解と協力』の上に立脚した新しい高校の設立を企てるものといえる」と述べている。期待される側面として、「地域の産業生活や労働との接面を獲得することによって、学習の内容に現実的な意味を獲得し、社会生活との交流を基盤とした自己形成と職業選択の教育が実現されること」を挙げている。また、「そもそも『普通教育』は、大衆化した中等教育が担うべき公共的使命を表現する概念であり、普通科、職業科を問わず、すべての高校教育の基軸を形成すべき理念なのである」とも述べている。

4 実践と結果(明らかになったこと)

(1) 県立荒砥高等学校総合学科の取組

教職専門実習Ⅱにおいて、県立荒砥高等学校の在校生1年次から3年次までの176名を対象に行ったアンケート結果から、生徒たちは総合学科である荒砥高等学校を積極的に選択したことがわかった。また、総合学科での学びに満足している生徒が多く、3年間の学びを通してその良さを認識できている。具体的には、総合学科の魅力を問う設問に対して、「行きたい系列があり、系統的な学習が可能(43.2%)」が、「魅力的な授業があり、

自分でアレンジした時間割が作れる(26.7%)」を上回り最多となっている。このような高い満足度が得られた理由は、カリキュラムの特徴として学校の周りにある資源をカリキュラムに取り込んでいることが挙げられる。荒砥高等学校周辺には、地元小中学校及び老人ホーム、そして白鷹町役場がある。役場の中に「荒砥高校をサポートする会」があり、荒砥高校生徒に対する様々な支援が行われている。生徒が地域と関わる取組として、お祭りの参加やボランティア活動があり、「フラワー長井線まつり」には、吹奏楽部の演奏や高校生と地域住民との交流がある。また冬には、役場職員と生徒が共に車で独居老人宅へ向かい、雪かきボランティアを行っている。このように、地域の資源(人・モノ・資金・時間・ネットワーク・情報)をうまく活用し、地域との結びつきをうまくカリキュラムに取り入れられれば、生徒の自己存在感や有用感が高められ、満足が得られると分析できる。

(2) 県内高等学校総合学科のカリキュラムの検討

表1は、山形県内高等学校総合学科の系列などをまとめたものである。基本情報として、開設年度、1学年クラス数、総生徒数、教員数(常勤)、平成28年度進路状況、現在設定の系列名及び系列の特徴を簡単に表している。系列とは、生徒にある程度のまとまりのある学習を可能にするとともに、生徒自身の進路の方向に沿った科目履修ができるようにするため、体系性や専門性等において

相互に関連する総合選択科目によって構成される科目群（総合選択科目群＝系列）としてまとめたものである。先にも述べたように、総合学科は進学も就職もできる学科をうたっているので、進学を目指す系列がほとんどの学校で設置されていることがうかがえる。さらに県内各学校には、母体となる前身の学校から引き継いだ系列や、その地域に欠かせない産業に通ずる系列がある。地域とのかかわりを前面に出している系列として、左沢高校の果樹園芸系列、北村山高校の生活総合系列、庄内総合高校の産業クリエイト系列、遊佐高校の地域共生系列がある。さらに、それらの取組を市町村の広報誌に積極的に載せて、地域住民に広く知らせることが大事である。ある学校では、広報誌に載せる学校紹介のページを生徒が編集している。将来を担う若者が、地域と高校の在り方をとらえて発信することにも重要な意義を感じる。

5 考察

国が提示する総合学科への現在の懸念材料は、生徒に目的意識や将来の進路への自覚を持たせるための学習を進めることが難しい状況にあることである。本研究を通して、高等学校総合学科の今後の在り方に必要なこととして、以下の3点が明らかになった。第1は、地域と学校がビジョンを共有し、連携した取組ができているかということだ。地域のリアリティーをカリキュラムと結びつけた上で系列を配置し、どういうカリキュラムを用意して自由な選択を保障していくかを地域と一体となって取り組むことが必要ではないだろうか。第2に、学校教育目標と照らし合わせて、生徒に地域社会で活躍するための資質・能力を身に付けさせることである。授業の取組を通して教師一人一人がマネジメントすることが必要だ。第3に、自治体と連携して高校での取組が広く知られ、自然と高校の行う事業に地域住民が参画して地元高校に通う生徒を教師と一緒に育てようという機運が高まることである。県内の総合学科高校には、市報や町報などに高校の取組を紹介し、地域の課題に前向きに取り組む若手が存在することを広く伝えている。地域に根差した存在感ある高等学校総合学科とは、一見接点がないようなあらゆる資源(主に人材)に接面を構成し、計画的かつ継続的に交流する場を設けることではないだろうか。

6 到達点と課題

本研究の目的は、高等学校総合学科が本来持っている魅力とは何かを明らかにし、「系列」を中心とした特徴あるカリキュラムの要素を探ることであった。このことについて、次の2点が明らかになった。第1に、総合学科は、様々な場面で生徒自らが選択することを通して、生徒の主体性を開発する役割を持っているということである。第2に、総合学科には、地域社会との協働を通して生徒が存在意義や自己有用感をもって学び、生徒相互の学びの共同体を創出する役割を果たすことができるカリキュラムがあるということだ。一方で、課題として見えてきたことも2つある。1つ目は、生徒が、主体的に選択する能力を育てるためには、日々の授業の中でも培っていく必要があるということだ。2つ目は、選択の自由は多くの場合1年次のみであり、一度選択したら原則変更がきかないことである。文部科学省(2013)の調査結果には、「総合学科について不満足な点」に関して生徒が回答した結果もあり、それによるとトップは「進路について考える時間がもっと必要(27.1%)」である。高校3年間通しての、キャリア選択ができにくい現状があることを伺わせている。この点に関しては、総合学科の学びを経験している在校生や卒業生が、総合学科に対してどんな考えを持っているか次年度調査してみることで、この課題の改善に向けて前向きに取り組みたい。

引用文献

- 文部科学省(2000)「総合学科の今後の在り方について(報告)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/009/toushin/000101a.htm(最終閲覧日平成30年1月24日)
- 文部科学省(2013)「資料4 総合学科について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryu/_icsFiles/afiedfile/2013/07/23/1337780_4.pdf(最終閲覧日平成30年1月24日)
- 佐藤学(1996)『カリキュラムの批評』, 世織書房.

Revitalization of Senior High School General Studies Course : Focusing on Cooperation with the Community

Masato MATSUMURA